

言葉を選んだ。そして、松陰やその弟子たちの行動や心の動きがより鮮明にわかるように、日本という国がどのように歩んだのかも記述した。

松陰の松下村塾からは、久坂玄瑞、高杉晋作、桂小五郎（木戸孝允）、山県有朋、伊藤博文ら、幕末から明治維新の主役たちが輩出されていった。それだけでも、松下村塾を指して「最強の教育機関」と呼ぶことはできるだろう。だが、その根底にあったものを知るためには、自身はわずか三十歳で刑死し、倒幕も維新も見ることのなかった吉田松陰の生涯と思想に触れる必要があるのではないだろうか。

本書を読み終わったとき、松陰の教えを受けた者たちがなぜ、日本史上最大の転換期の主役になり得たかがわかるはずだ。



（松陰が養子に入った、長州藩山鹿流軍学師範・吉田家の家紋）

目次

序	「狂」の人間こそ、愛するべき。 頭脳だけの人間は、危険である。……………	2
吉田松陰人物相関図	……………	8
◆第一章 立志	— 吉田松陰 十一〜二十四歳の言葉 —	
1	戦法の本であっても、完璧に勝つ方法は、 どこにも書かれていない。……………	12
2	志さえあれば、 どんな目標もかなえることができる。……………	14
3	人材・武器・訓練・作戦の整備を、 一日も欠いてはならない。……………	16
□幕末史 1804—1846	……………	18
4	平和な時代こそ、新しいものを 取り入れることが大切。……………	24
5	生き生きした心を持つ人は、 感動をきっかけにチャンスがめぐってくる。……………	26
6	「できない」は、「やらない」だけである。……………	28
□幕末史 1828—1851	……………	30
◆第二章 狂気	— 吉田松陰 二十五〜二十八歳の言葉 —	
7	高い志を持つことが、「究める」ことを可能にする。……………	34
8	日本に生まれた以上、日本のことを 知らなければ、生きていく意味などない。……………	36
9	心はやはり、飛ぶかのようだ！……………	38
10	「誠」とは何か。「実行」「専念」「継続」である。……………	40
□幕末史 1852—1853	……………	42
11	人の生きざまを知るには、まず、 その土地・風土に目を向けるべきだ。……………	50
12	法律を破つてでも、世界を見たい。……………	52
13	虎の猛々しさを身に付けなければ、 武士になることはできない。……………	54
14	どんな子どもになるかは、親の教育次第。……………	56
□幕末史 1854—1855	……………	58
15	「やったりやらなかったり」は、 学問においては厳禁である。……………	64
16	生きることを楽しみ、死ぬことを楽しむ。……………	66

17	人を信じて失敗するのはよい。 人を疑って失敗したくない。	68
18	むやみに「師匠」「弟子」にならない。	70
19	失敗を隠そうとすることは、 恥ずべきことである。	72
20	どんな人間にも、必ずすぐれた部分がある。	74
□幕末史 1854—1855		76
21	まずは「自分」に目を向ける。 それこそが、着実である。	82
22	学問とは、「生き方」を学ぶことだ。	84
23	自らの苦勞を惜しんでいては、 世の人々に安定をもたらす人物にはなれない。	86
24	一ヶ月でダメなら二ヶ月、 二ヶ月でダメなら百日……あきらめてはいけない。	88
25	憂慮すべき事態となっている理由を 知らないことをこそ、憂うべきである。	90
□幕末史 1856—1858		92
35	帰っては来れないと思ひ定めた 死出の旅に、涙が止まらない。	130
36	名前を残せたら、いつ死んでもよい。	132
37	大和魂は、この世に置いていく！	134
38	子が親を思う心以上に、親が子を思う心は深い。	136
□幕末史 1858—1859		138
◆第四章 残志		
— 吉田松陰をとりまく人々の言葉 —		
39 井伊直弼	茶会とは、人生「一期一会」の出会いである。	144
40 久坂玄瑞	草の根の民が決起する以外に、手立てはない。	146
41 宮部鼎蔵	さあ子どもたちよ。戦いの支度を！ 御所の桜が散ってしまう前に。	148
42 吉田稔麿	乱れたこの世、どうすればよいのか。	150
43 佐久間象山	私は、世界とつながっていることを知った！	152

◆第三章 留魂		
— 吉田松陰 二十九〜三十歳の言葉 —		
26	農民兵に至るまで一定の訓練をすれば、 強力な軍団ができる！	100
27	外に媚び、内を脅かす者は、 「天下の賊」である。	102
28	民から立ち上る人を望む以外に、 未来の希望はない。	104
□幕末史 1858		106
29	謀略とは、「ない」に「ある」かのように 振る舞うことだ。	112
30	日本の未来のために、 自分は国や主君に尽くす！	114
31	饒舌な人こそ、大事なときには黙り込む。	116
32	読書は人の心を変える。何と恐ろしいものか。	118
□幕末史 1858—1859		120
33	他人の批評はどうであれ、ありのままに生き抜く。	126
34	命は国家に預けた。 生きるも死ぬも、忠誠を尽くす。	128
□幕末史 1860—1864		154
44 高杉晋作	面白くないこの世の中を、面白くする。	160
45 品川弥二郎	「錦の御旗」で、朝敵を倒すべし！	162
□幕末史 1864—1868		164
46 木戸孝允	人民は病人、政府は医者である。	170
47 前原一誠	私は死んでも、御恩に背くことはない！	172
48 玉木文之進	百の策略も、一つの誠意にはかなわない。	174
49 山県有朋	私は常に、一人の武士に過ぎない。	176
50 伊藤博文	憲法制定は、「日本の基軸」の確定から、 始めなければならぬ。	178
□明治維新史 1868—1889		180
おわりに		186
吉田松陰関係年表		188